

物語を自立的に読む子供を育てる国語科学習指導

～異なる解釈から判断・統合する対話活動を通して～

研修教諭 福島 巧大
指導教諭 安永 亮

1 主題設定の理由

(1) 教育の動向から

「義務教育の在り方ワーキンググループ審議まとめ」(令和6年12月)では、目指すべき義務教育・学校教育の取組の一つとして、生涯学習社会を生き抜く自立した学習者の育成が求められた。自立した学習者とは、学びを自分事として捉え、自発的に他者と関わりながら学びを深めていく子供のことである。また「初等中等教育段階における生成 AI の利用に関する暫定的なガイドライン」(令和5年7月)では、生成 AI の普及と発展を踏まえ、生成 AI に全てを委ねるのではなく、最後は自己の判断や考えが必要であることを指導していくことの重要性が示された。つまり、予測困難な時代において、自分に必要なことを他者の力を借りながら、自分で学んでいく力の必要性が指摘されている。しかし、令和6年度全国学力・学習状況調査の報告書では、小学校国語「読むこと」の指導改善ポイントとして、「人物像や物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりする指導」が挙げられている。

つまり、一部の場面や叙述だけでなく、物語全体から人物像や登場人物の行動、気持ちを捉えたり、様々な表現がもつ効果を自分の知識や経験から考えたりすることができるようにしていくことが求められている。しかし、言葉の意味や働き、使い方や生活経験、生活環境によって、人物像や物語の全体像、表現の効果の感じ方や考え方は変わってくる。そこで、本研究では、読む目的をもち、他者と関わりながら解釈を広げ深める物語を自立的に読む子供の育成が必要であると考え、本主題を設定した。

(2) 子供の実態から

国語科の学習に関するアンケートを本校の第2・4学年71名を対象に行った(資料1)。この結果から、物語の学習において目的意識をもち、他者と交流しながら、解釈をつくっている児童が少ないと分かる。これは、物語を読むことに目的意識をもっておらず、他者と関わりながら読む必然性を感じることができていないことが原因だと考える。そこで、他者と協力することを通して、複数の視点や根拠から場面の様子や人物の変容について想像する、物語を自立的に読む子供を育てる本研究は意義深いと考える。

【読む目的について】	当てはまる	少し当てはまる	あまり当てはまらない	当てはまらない
物語の学習で学習課題を意識して、学習を進めることができていますか。	8%	45%	28%	19%
自分で解決したい問いを立てて、学習の中で解決しようとしていますか。	10%	20%	43%	27%
【自ら他者と関わることについて】	当てはまる	少し当てはまる	あまり当てはまらない	当てはまらない
自分の考えを広げるために、友達と対話することができていますか。	40%	45%	10%	5%
友達と協力して、問いを解決しようとすることができていますか。	32%	40%	20%	8%
【広げて深めながら想像について】	当てはまる	少し当てはまる	あまり当てはまらない	当てはまらない
友達の考えを参考に、自分の考えをつくりかえることができていますか。	27%	44%	18%	11%
友達の違う考えや疑問に思ったことを解決したことを基に、自分の考えをよりよくすることができていますか。	20%	50%	15%	15%

資料1 子供の実態について(N=71)

(3) これまでの指導の反省から

これまでの文学的な文章の指導の課題として、以下のようなことが挙げられる。

- 学習課題を意識した単元構成を組むことができていなかった。
- 目的をもたせ対話をする仕組みを、十分に整えることができていなかった。

これまで、学習課題を意識した単元構成ができておらず、それぞれの学習過程が独立し、つながりをもたせることができていなかった。また、目的をもたせた上で、互いの解釈を伝え合ったり比べたりする対話の仕組みを整え、子供と十分に共有することができていなかった。そのため、教師対子供の一问一答の形で学習が進んでおり、教師主体の授業になっていた。そこで、本研究では、話し合う目的をもたせた上で、他者と対話することで新たな視点や根拠を獲得したり、自己と対話することで解釈を再構成したりしながら、物語を自立的に読む子供の姿を目指す。

2 主題の意味

(1) 「物語を読む」とは

読み手が、自分の既存の知識や経験を基に、場面の様子やある出来事に遭遇した人物の変容について具体的に想像していくことである。

本研究では、読みの対象を物語とする。物語とは、作者が経験したことや考えたこと、想像したことを基に、ある出来事に遭遇した人物の変容を描いた文章のことである。また、既存の知識や経験とは以下の通りである。

- 知識…言葉の意味、働き、使い方、考え方
- 経験…実体験、これまでの学習経験

場面の様子や人物の変容について具体的に想像するとは、書かれてある内容や場面の様子、人物の行動の理由を理解し、意味付けることである。

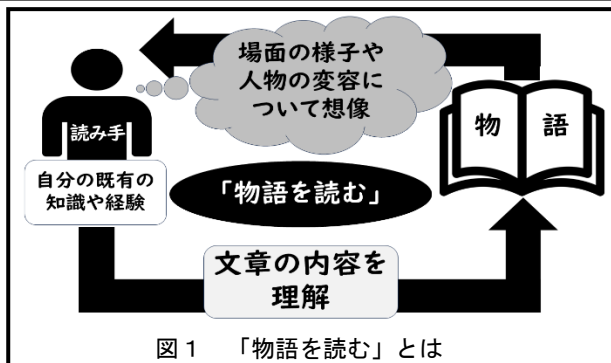


図1 「物語を読む」とは

(2) 「物語を自立的に読む」とは

読み手が目的をもち、自ら他者と関わりながら、複数の場面に基に、多面的に場面の様子や人物の変容したことを広げて深めながら想像し、自分の考えをまとめることである。

目的とは、単元の初めに全体で共通理解を図る読み手が自ら作品と関わろうとするための単元の学習課題のことである。初発の感想をもつ際、相手に伝えたい、自分や他者の問いを解決したいという目的意識が低い。そこで、相手に自分の感想や考えを伝えたい、自他の問いを解決したいという目的意識をもたせることで、読み手は自ら作品と関わろうとすると考える。そのため、自立的に読むことができるように、単元の初めに全体で共通理解を図る読む目的を設定することが大切だと考える。

次の表が、物語を自立的に読むための各発達段階における目的の例である。

表1 物語を自立的に読む目的の例

	物語を自立的に読む目的の例
低学年	・好きな場面や登場人物の好きなところを友達に伝える。 ・自分がどのように読みたいか音読の仕方を考え、伝える。
中学年	・登場人物について思ったことや考えたことを友達に伝える。 ・題名の意味について自分が考えたことを友達に伝える。
高学年	・人物像や全体像、表現の効果から物語の魅力を伝える。 ・問いに対する自分の納得解を友達に伝える。

また、自ら他者と関わるとは、多面的に解釈するために、自分と他者の解釈を比べたり、他者の違った視点や叙述を根拠にした解釈を取り入れたりすることである。文や語を解釈する際、読み手一人だけでは、自分だけの既存の知識や経験、または一部の場面のみを根拠にして解釈するため、一面的な見方でしか解釈することができていないことがある。しかし、自分と他者の解釈と比べたり、他者の違った視点や叙述を根拠にした解釈を取り入れたり、自ら他者と関わることにより、その解釈は多面的な解釈となると考える。このように、部分的な言葉や文を多様な視点や複数の根拠を基にして解釈することを繰り返していくことで、一人で読んだときには気付くことができなかった場面の様子や人物の変容について想像することができると思う。

さらに、多面的な解釈を繰り返していくことを通して、自分の解釈を広げて深めることができる。解釈を広げる、深めるとは、以下のとおりである。

- 広げる…解釈の視点が aumentarse、解釈する際の根拠が増えたりすること。
- 深める…作品の設定や場面を関連付けたり、叙述や語句にこだわりをもったりすること。

このように、自ら他者の解釈を取り入れたり、比べたりすることを通して、自分の解釈を広げたり深めたりしながら、物語を自立的に読むことができるようにするためには、「目的をもつ段階」、「広げ深める段階」、「まとめる段階」の三つの段階が必要であると考え（図2）。

「目的をもつ段階」では、物語を自立的に読むことができるように読むための学習課題を設定することを目的とする。子供は、物語を読んだ際、自分の知識や経験を基にして、作品や人物について感想や考え、疑問をもつ。これらを他者と交流することで、子供はそれらにズレがあることに気付いたり新しい疑問をもったり、自分の感想や考えをうまく伝えられない不十分さに気付いたりして、それらを解決したい、他者に納得してもらえようによりよくしていきたいという思いをもたせる。そして、そういった思いをもとに、目的となる単元の学習課題を設定する。

「広げ深める段階」では、共通の問いに対する解釈について、自分の解釈を広げて深めることを目的とする。共通の問いに対して、様々な解釈をした他者と交流し、感じた納得感や違和感を基に、自分の解釈に取り入れるか取り入れないかを判断し、解釈を広げることができるようにする。そして、共通の問いに対する他者の解釈や個人の問いに対する自分の解釈を基にして、自分の解釈を再構成し、解釈を深めることができるようにする。

「まとめる段階」では、目的となる単元の学習課題について、自分の考えをつくり、考えをまとめることを目的とする。これまで、他者の解釈を基につくってきた共通の問いに対する自分の解釈や、個人の問いについて自分がもった解釈から、学習課題に対する自分の考えについて付加、修正、強化させる。そして、考えを再構成させることで、自分の考えの変容をまとめることができるようにする。

これらを踏まえ、本研究で目指す、物語を自立的に読む子供とは、以下のような資質・能力を身に付けた子供のことである。

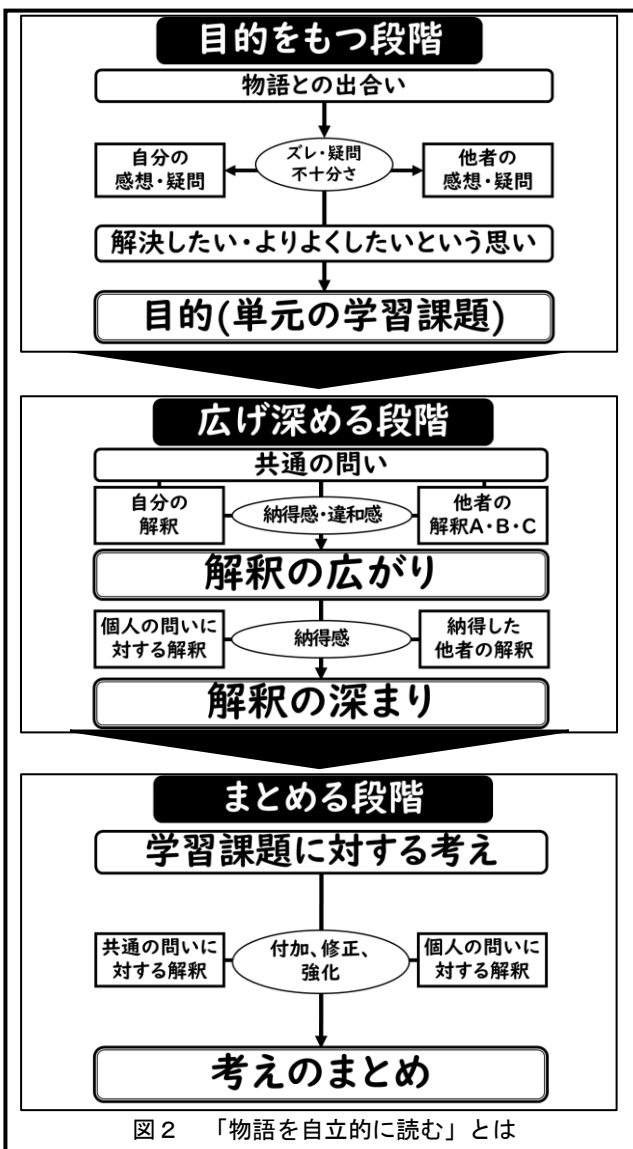


図2 「物語を自立的に読む」とは

表2 本研究で目指す子供の資質・能力

知識及び技能	場面の様子や登場人物を表す言葉の意味や働き、表現の工夫について理解したり、複数の叙述を整理し、自分の解釈をつくる際に、それらを根拠として用いたりすることができること。
思考力、判断力、表現力等	物語の内容や登場人物について、様々な視点から、複数の叙述を関連付け、具体的に想像し、既存の知識や経験と結び付けることで、作品や登場人物の変容について自分の解釈をまとめること。
学びに向かう力、人間性等	物語を読み、自分事として問いをもち、他者と解釈を共有することで、自分の読みが広がったり深まったりしたことや、単元の終末にもった感想や考えが変容したことを自覚すること。

3 副主題について

(1) 「異なる解釈から判断・統合する」とは

異なる視点をもった他者と自分の解釈を比べ合い、他者の解釈に納得感や違和感をもち、問いに対する自分なりの解釈を、多様な視点や様々な根拠を関連付け、再構成することである。

本研究における解釈とは、問いに対して子供が考えた主張と根拠(叙述)、理由のことである。異なる解釈とは、問いに対する自分とは視点が違う解釈のことである。他者と解釈を比べ合うとは、他者と自分の解釈の共通点や相違点を見付けることである。自分の解釈を広げたり深めたりするためには、以下のように判断・統合する必要がある。

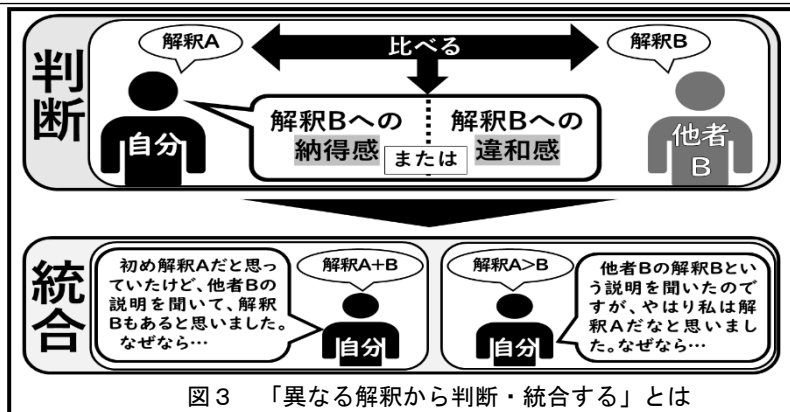


図3 「異なる解釈から判断・統合する」とは

- 判断：異なる解釈への納得感や違和感を基に、自分の解釈に必要な他者の解釈を整理する。
- 統合：異なる解釈を基に、自分の解釈やその根拠、理由を付加、修正、強化し、自分が納得できる解釈へと再構成する。

異なる解釈から自分に必要な解釈を整理し、それらを用いて自分の解釈へと付加、修正、強化することで、自分の解釈をより納得感のある解釈へと再構成することができると考える(図1)。

(2) 「対話活動」とは

問いを解決するという目的達成のために、自分がもった考えを他者に説明したり、他者の考えを聞いたりして、自分の中で考えを問い直す活動のことである。

中央教育審議会答申(令和3年1月)では、改めて「対話的な学び」の重要性について説明された。「対話的な学び」では、自分を取り巻く「他者との対話」と、情報と自分の経験を結び付ける「自己との対話」の活性化を図ることが示されてある。そこで、本研究において、学習者同士で話し合い、それぞれの解釈を広げていく「他者との対話」、他者の解釈と自分の経験を関連付け、自分の解釈を付加、修正、強化する「自己との対話」を意図的・計画的に設定していく。さらに、子供が意欲的に対話活動に取り組むことができるようにするために、それぞれの対話活動に目的をもたせる。子供が意欲的に対話をする目的としては、次のようなものが考えられる。

- 自分の考えを相手に理解して欲しい。
- 友達のことを知りたい。
- 一人では解決できない課題を解決したい。
- 自分の考えをよりよくしたい。

このような目的のもと、子供は他者や自己との対話を往還することで、自分の解釈を広げたり深めたりすることができると考える。

また、本研究における目指す子供を育てるためには、対話活動は必須であると考え。それは、物語を自立的に読むことは、自分一人で読むことに留まっていたりできないからである。物語は、登場人物の人物像や場面の様子についての感じ方や考え方に、一人一人違いが生まれる。なぜなら、人によって言葉の意味や働き、使い方の捉え方や生活経験、生活環境に違いがあるからである。そこで、自分がもった解釈や根拠となる叙述、理由といった考えを他者に説明したり、違う考えをもった他者の説明を聞いたりする中で、自分の解釈が適切かを見直すことができると考える。さらに、他者の解釈の説明を聞いて、主張や根拠となる叙述、理由を付け加えたり、修正したり、改めて自分の解釈のよさに気付いたりすることもできる。このような対話活動を通して、物語を自立的に読むことができると考える。

(3) 「異なる解釈から判断・統合する対話活動」とは

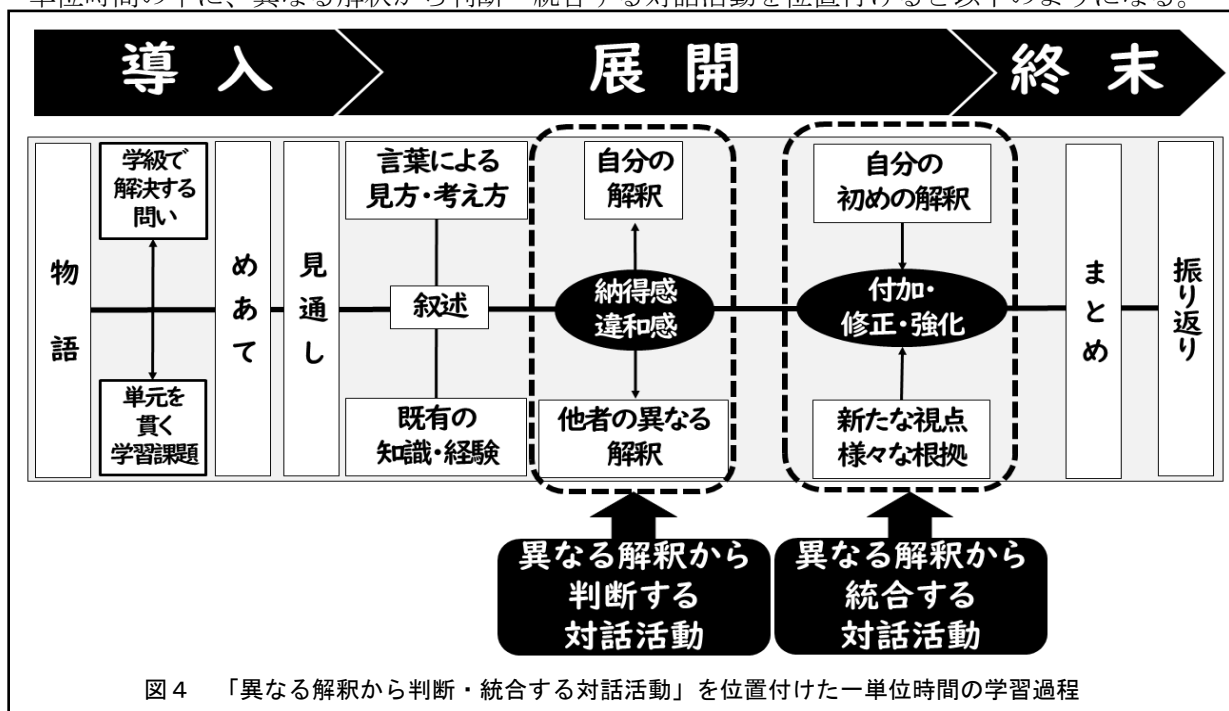
新たな視点や根拠を得るために自分とは異なる解釈をもつ他者と交流する「異なる解釈から判断する対話活動」、新たな視点や根拠を関連付け、自分の解釈を付加、修正、強化するために自分で解釈を再構成する「異なる解釈から統合する対話活動」のことである。

異なる解釈から判断・統合する対話活動は、単元の展開段階における一単位時間の中に位置付け、次の対象、目的、内容、方法によって成り立つ。

表3 異なる解釈から判断・統合する対話活動の目的、内容、方法

活動	異なる解釈から判断・統合する対話活動	
	異なる解釈から判断する対話活動	異なる解釈から統合する対話活動
対象	他者	自己
目的	自分とは異なる視点からつくられた新しい解釈や根拠を得るため。	新たに得た解釈や様々な根拠を基に、自分の解釈を付加、修正、強化するため。
内容	自分とは異なる視点から解釈した他者を自ら選び、解釈を説明し合ったり、質問し合ったりして、自分が必要だと思う解釈を判断し、収集する。	新たな解釈や様々な根拠を関連付け、自分の解釈を付加、修正、強化して、再構成する。
方法	① 共通の問いに対する自分の解釈を、自分の既知の知識や経験や叙述を基につくる。 ② それぞれの解釈を学級の中で共有し合って、自分とは解釈が異なり、解釈を聞きたい他者を選ぶ。 ③ 相違点に着目し、自他の解釈を説明したり質問をし合ったりして、互いの解釈の違いを理由や根拠から明確にする。 ④ 自分が納得した他者の解釈が書かれたシートを自分の学習者用端末へと送ってもらう。	① 自分が納得した他者の異なる解釈や個人の問いを解決していった過程を振り返る。 ② 共通の問いに対して、再度、自分の解釈を書き直したり、付け加えたりする。

一単位時間の中に、異なる解釈から判断・統合する対話活動を位置付けると以下ようになる。



4 研究の目標

国語科学習において、物語を自立的に読む子供を育てる方途として、異なる解釈から判断・統合する対話活動の在り方とその有効性を究明する。

5 研究の仮説

国語科学習指導において、異なる解釈から判断・統合する対話活動を次の三点から工夫して行えば、物語を自立的に読む子供が育つであろう。

【観点1】教材化の工夫

【観点2】ICT機器の活用の工夫

【観点3】問いの設定の工夫

6 研究の構想

(1) 教材化の工夫

物語を自立的に読む子供を育てるために、次の三つの視点から教材分析を行う。

表4 教材分析の視点

主題性	物語文を通して作者が伝えたいことは何であることを明らかにする。 ・登場人物の見方や考え方、生き方、変容 ・題名の意味 ・作者の考え
構造的性	登場人物の行動や性格、気持ち、気持ちの変化、状況設定により作品のテーマに迫るための作品の組み立てを明らかにする。 ・中心人物の変容と物語の場面の移り変わり ・状況設定
叙述性	登場人物や場面の様子を自立的に描き出す表現や情景描写に着目して表現技法の特徴を明らかにする。 ・比喩表現、倒置法、体言止め、反復法などの表現技法 ・情景描写、色彩表現、象徴性や暗示性の高い表現

また、教材の内容の系統性を明らかにし、本教材の重点内容は何かを明らかにしておく必要がある。特に、二学年間での内容の高まりを意識して教材を分析する必要がある。

(2) ICT機器の活用の工夫

本研究においては、ICT機器を次の三つの目的で使用する。

表5 ICT機器を使う目的

機能	文学的な文章の学習における活用
保存機能	○書いたものや発言等の解釈、前時までの板書を学習者用端末上に記録しておく。 ・前時学習を振り返り、本時学習のめあてをつかむ。 ・前時学習までの学習の流れを振り返る。 ・気持ちの変化や人物像を想像する際、前時までの学びを振り返る。 ・自分の解釈の変容を比較することで学びの自覚化を図る。
提示機能	○学習者用端末や大型モニターを使って、様々な情報を映し出す。 ・教師が作成し配布された資料等を自分の学習者用端末で見る。 ・自他の立場や解釈を提示することで、自他の解釈の共通点や相違点が明確になる。
共有機能	○自他の考えを複数人が同時に見る。 ・自分の解釈をつくることができない場合に、他者の解釈を参考にする。 ・自他の解釈を比較する。 ・全員の問いや解釈を一つの画面で共有し、分類・整理する。

(3) 問いの設定の工夫

対話活動をする際、問いの存在は必要不可欠となる。なぜなら、その問いの解決が対話の目的となり、対話をする意味が生じるからである。問いとは、作品を読んで新しく入った情報とこれまでもっていた自分の知識や経験、価値観との間に生じたズレや葛藤、矛盾を感じたときに抱くものである。

また、本研究では、この問いを大きく二つに分ける。「共通の問い」と「個人の問い」である(図5)。

共通の問いとは、学級全員でもつ同じ問いのことである。個人の問いとは、一人一人がもつ問いのことである。本研究においては、この二種類の問いを解決していくことを学習過程に設定していく。

共通の問いについては、この問いについて一人一人が解釈し、それぞれがつくった様々な解釈を学級の中で交流しながら解決を目指していく。また、個人の問いは、共通の問いを解決していく中で、それぞれ個人で解決を目指していく。そこで、共通の問いについては、以下のような「問いの設定条件」が必要だと考える。

- 人によって様々な解釈ができるもの。
- 友達と交流する価値があるもの。
- 叙述から考えられるもの。
- 作品や登場人物に関するもの。

そして、単元の導入段階に、このような共通の問いと個人の問いをつくる時間を設定する。それぞれの問いは以下のような順序で設定する。

順序	内容
①	題名読みをして、作品に興味や関心をもたせ、題名から連想される知識や既習の知識を想起させたり、内容について予想させたりする。
②	作品を読み、題名読みをしたときの予想やこれまでの知識や経験、価値観のズレから、疑問をもたせる。
③	「問いの設定条件」と照らし合わせ、自分の疑問を精選し、問いとしてもたせる。
④	学級でそれぞれの問いを出し合わせ、場面ごとや登場人物ごとに問いを整理させる。
⑤	出てきた問いを、再度、学級全体で「問いの設定条件」と照らし合わせ、「共通の問い」を精選する。
⑥	精選された「共通の問い」を、物語の展開順に並び替えさせ、解決していく順序を決定させる。
⑦	選ばれなかった問いの中や自分がつくった問いの中から、自分が解決したいと思う問いを選び、「個人の問い」として設定する。

疑問とは、物語を読んで分からなかったことや不思議に思ったことであり、問いを設定するきっかけとなるものである。そのため、問いはこの疑問をそれぞれがもち寄り、問いの設定条件と照合させ、学習を進めていく追求の観点として設定する。

このような過程で設定した問いの解決を目的に、他者と対話を通して、これら問いを解決していく中で、子供達は自分の解釈を広げたり深めたりすることができ、物語を自立的に読むことができるようになると思う。

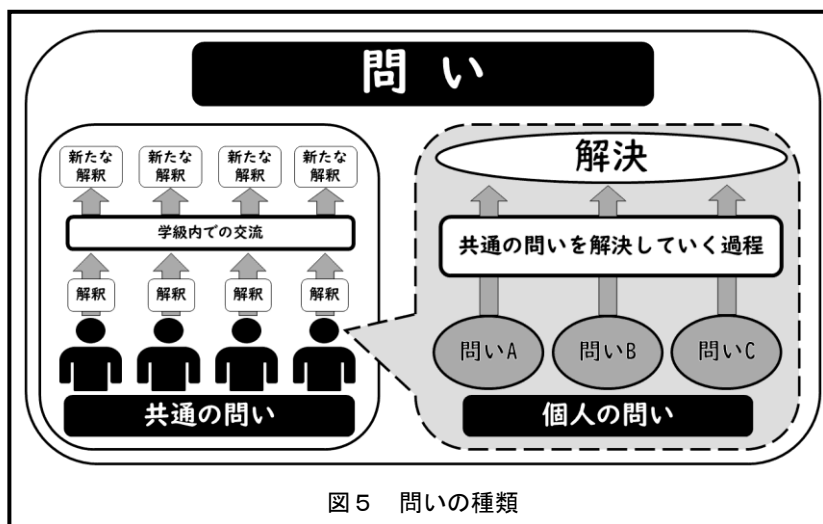
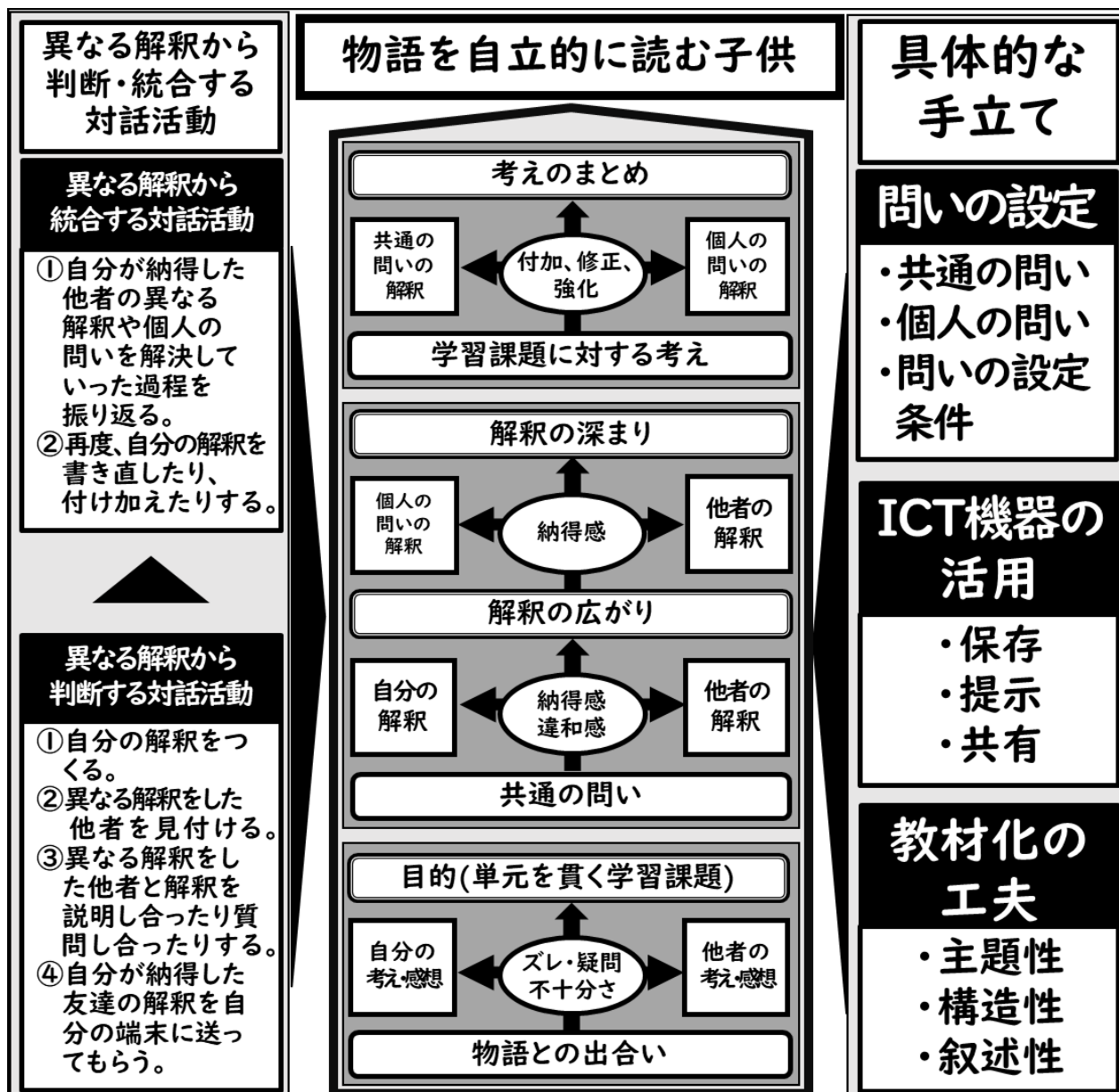


図5 問いの種類

7 研究構想図



8 検証計画

検証の過程	検証の観点	検証方法
異なる解釈から判断する対話活動 【展開前段】	共通の問いに対して、自分とは異なる視点で解釈をつくっている他者を自ら選択し、互いの解釈を説明したり質問し合ったりして、交流することは、解釈の視点や根拠を増やす上で有効であったか。	○対話活動の様子 ○初めの解釈と再構成した解釈の比較
異なる解釈から統合する対話活動 【展開後段】	共通の問いに対して、自分とは異なる視点で解釈をつくっている友達と互いの解釈を交流した際に納得したことや、個人の問いの自分なりの解釈を基に、新しいシートへと自分の解釈を書き直すことは、自分の解釈を付加、修正、強化する上で有効であったか。	○再構成された解釈 ○感想